

学校図書館の利用指導体系表の変遷と利用

菊地 茜

1998年の学習指導要領の改訂以降「生きる力」の育成が求められるようになり、その能力の1つである「情報活用能力の育成」が必要であるとされてきた。学校図書館では、その育成に必要な指導である、図書館や図書館資料を利用した情報の探索や情報活用に関する体系的な学習を図書館利用指導として行ってきた。

本研究では、学校図書館の利用指導に関する体系表の変遷と、教育の情報化に対して学校図書館の利用指導の内容は、どのように変化してきたかを明らかにし、その利用指導体系表の在り方を考察することを目的としている。

研究方法は(1)学校図書館の手びきの刊行と利用指導の変遷の分析、(2)学校図書館利用指導の体系表の比較、(3)各自治体が公表した学校図書館を利用する学習(利用指導)の体系表の比較の3点を行った。

比較・分析の結果、文部省・全国SLAにおける学校図書館の利用指導は、最初「図書館や図書資料を効果的に利用できるための指導」であったが、情報教育の必要性が重要視され、利用指導は「図書資料に限らない多様なメディアを利用した情報活用能力の育成」に変化していったことが明らかになった。それに合わせて、体系表においても、情報活用に関する指導や、情報化社会について学ぶ指導に関する指導領域が導入されるようになった。しかし一方で、図書館・図書の役割と構造に関する指導、参考図書などの印刷媒体の情報源の利用に関する指導項目は減少していく傾向があることが分かった。そのため、特に全国SLA体系表において、情報活用能力の育成に関する指導内容は具体的になっていった一方で、図書館・図書の役割と構造に関する指導、情報源の利用に関する指導において、体系表に記載があるのは、ごく基本的な指導項目にとどまってしまっている。

また、全国SLA2004年体系表以降に作成された、各自治体の体系表は「学校図書館を利用した情報活用能力の育成」を目的に作成されていることが多いが、その指導内容や構成においては自治体ごとで異なることが分かった。そのため、自治体で体系表を作成していても、習得する知識や指導範囲に差が生まれてしまうことになる。

以上の分析から、学校図書館を利用した情報活用能力の育成の指導内容を明確に示し、各学校で体系的かつ一定のレベルの指導を行うための指針となる、体系表を作成する必要があると考える。その体系表は、社会の情報化に合わせて、情報の扱い方の指導や、新しい電子メディアの利用に関する指導などを取り入れた、現在の情報教育や、利用指導のニーズに合った指導内容である必要がある。しかし、従来の情報源である、参考図書や目録、資料リストなどの利用に関する指導も疎かにしてはならない。学校図書館を活用した情報活用能力の指導であることを念頭に置き、図書から電子メディアまで、幅広く情報源を収集し、それらを利用することができる、情報活用能力の育成をする体系表を作成していくべきである。

(指導教員 平久江祐司)